

仙台日独協会の設立にあたり、ドイツの精神生活とこの仙台という町との密接な関係について考えてみたい。

国の内外に著名な東北大学だけでもすでに 24 名のドイツ文学者と 2 名のドイツ人教師がドイツ語、ドイツ文学又は、ドイツ文化を教えているという事実からも、これまで大学には、親独的伝統が流れていた事がわかっていこう。この伝統の中で、数人のドイツ人の客員教授がすぐれた役割を果たして来たのである。歴史を振り返りながら、仙台に住んでいたドイツ人教師達に一人一人登場してもらって、その運命を映し出すのも確かにやりがいのある魅力的な仕事であろうが、これは来たべき時代の年代記編者にまかせることにして、ここでは科学や文化に名をなし、仙台が彼等の人生の中で重要な逗留地となった 3 名の人物の横顔を紹介したい。3 人共、著名な作品の著者であると同時に、日本及び東アジア文化を深く理解することに力を尽してきた作家でもある。仙台がこのようなすぐれた精神科学者や、日本の理解者の教師としての仕事の場であったという事は、この町にとって名誉となる事であろう。

博識なドイツ人が仙台又は、東北大学という名を耳にした時にまず思い出すのは、オイゲン・ヘリゲルの著書「弓道における禅」というあの有名な北日本を主題とした小冊子であろう。多くのドイツ人（及び他のヨーロッパ人）は、ヘリゲルによって始めて日本の禅仏教の神秘的な世界について予想することが出来るようになった。読者から読者へと紹介されて多くの人々の注目の的となったこの書物は、まず、1948 年にコンスタンツで出版され、1951 年にはミュンヘンの夫・ウィルヘルム・バート出版社に引き継がれ、再版されてほぼ二十版にまで及んでいる。1931 年にはオランダ語に、1953 年には英米語、さらにフランス語、イタリア語に翻訳された。新聞の大見出しに取り上げられることはなかったが、出版されて現在に至るまで 35 年間ずっと人々の注意が向けられ、多大の影響をまき起した。オイゲン・ヘリゲルが 1936 年「弓を射る騎士的技術」という題で、ベルリンの日独協会で行った講演がこの作品の核心で、これは雑誌「日本（ヤープン）」に掲載された。1937 年及び 1940 年に日本語訳にも出版された。

「東北帝国大学で、哲学史を教える意向はないかという問い合わせのあった時、日本の国土、国民と知り合いになる可能性を喜んで受け入れた、というのも、これによって仏教と同時に、その沈潜の実践や神秘説と関り合うことなどが出来る見込みがあった故に外ならなかったのである。」(1) とヘリゲルは書いている。当時ハイデルベルクにおいて教職の身にあったこの哲学者は、学生の頃から神秘説に深く心を寄せており、日本の丁重に護られた神の伝統をつきとめてみたいという長い間の願望をかなえたいと思い、仙台への招聘を受けることにしたのである。それまでヘリゲル(1884 年～1955 年)は、大学の教師になる過程で神秘主義の世界解釈をしているという兆しささえ見せたことはなかった。彼はもともと新カント派の哲学者で、ハイデルベルク(及びフライブルク)の学派で、カントの批判的研究法を精神諸化学に応用し、新カント主義の価値哲学及び文化哲学の道を切り開いた「西南ドイツ学派」と云われる学派に属していた。この学派の思想傾向は、その名声

を博する2人の著名な思想家ウィルスヘルム・ヴィンデルバンド（1848年～1915年）とハインリッヒ・リッカー（1863年～1936年）等により創唱されドイツの国境を越えて大きな影響を及ぼした。彼等の所には多くの国々からの聴講者が殺到した。日本人も人後におちなかつた。日本では明治後期及び大正初期に新カント派は化学の理論的基礎づけに決定的な貢献をし、ハイデルベルク学派は個性（「個性記述学」）を強調することによって意識的に個の自己統治を行う生活型を作る事に大いに貢献した。ヴィンデルバンドの弟子であったヘリゲルは、1923年リッカーとの所で教授資格を取得した。当時彼は、三十代で戦死した哲学の友として話し相手であり、リッカーの大変優秀な弟子であった一才年下のエーミール・ラスクの全集をこつこつと骨を折って出版しようとしていた。

戦後、ヘリゲルは特にハイデルベルクで哲学を学んでいる日本人に心が魅きつけられていた。彼等を通して、はじめて東洋的な特質を個人的に知ることが出来たのである。ヘリゲルは1925年にゴータで出版された全集「禅－日本の生きた仏教」の翻訳者であり編集者である大間秀英に出会った。この選書はヘリゲルのハイデルベルクでの同僚で、後に哲学と教育学の講師となったアウグスト・ファウストが編集に協力している。さらにプロテスタント神学のルドルフ・オットーも序文を書いている。

ヘリゲルは三十年後の第二次大戦後、文部大臣の要職についたカント学者の天野貞祐とも交際があった。天野貞祐はヘリゲルと共にヴィンデルバンドの墓を訪れたこと、ヘリゲルの熱心な教師としての仕事ぶり、講義が明確で十分考えられたものであった事などを記述している。1923年の冬、天野貞祐は、ヘリゲルのプラトン哲学の講義に出席した。戦後の経済状況は悪く、講義室には暖房が入っていなかったため、ヘリゲルは聴講者さえよければ自分は休講にしてもよいと提案した。しかし学生は反対し、底冷えのする寒さの中でもプラトンのイデア論の講義を聞きたがった。1920年代初めに教会史の学者である石原謙が、ハイデルベルクに研究の為に滞在していた。石原謙は五十年後にループレヒト・カールス・ハイデルベルク大学より、名誉博士の称号を与えられている。彼はヘリゲルと同様1924年から東北帝国大学法文学部で教えはじめた。そしてこの2人の学者の間には、親密で友好的な信頼関係が生まれたのである。このようにしてヘリゲルの東アジアへの旅が始まる以前にハイデルベルクでは、彼のまわりにドイツの哲学者との読書会の型で日本人のサークルが作られていた。こうした多様な個人的付き合いから、ヘリゲルに仙台で教えなにかという招聘の話が生まれたのである。

ヘリゲルは、広瀬川の畔りの大学の宿舎に住んだ。この川を見て故郷のネッカー川を度々懐しく思い出し、仙台の森の多い丘陵を見てハイデルベルクを懐しんだ。新しい仕事の場でも彼は、不自由な目に会わなければならなかった。北日本の冬の寒さは厳しいにもかかわらず、暖房は充分効かなかった。当時ヘリゲルのもとで学んだ有名な教育哲学者稲富栄次郎は、当時を思い出して次のように書いている。「ヘリゲルは冬の午後四時から五時半に寒くて暗い木造校舎の中で、わずかの学生のために極めて熱心に講義を行っていた。その電燈に照らされた青白い真面目な横顔はまるで禅僧のような感じさえした。そして授業が終

ると彼は、学生と一緒に凍った雪の夜の街をゴム長靴をはいて、宿舎まで歩いて帰った。道すがら話題はいつも学問上のことばかりに限られ、熱烈な討論が続けられた。官舎の門の前まで来ても話しはつきず、しばらく立ち止まって討論を続け、話しにケリがついたところでやっと別れるのである。」と書いている。

彼の授業は、ハイデルベルク学派の伝統を保ち、新カント学派の価値哲学がその中心であった。ラスク、リッカー、ヴィンデルバント、その師ルードルフ・ヘルマン・ロツェ（1817-1881）について講義した。ここでは、カントの研究が中心になっていた。仙台にいる間にヘリゲルはカントに取り組み「形而上学的形相」（チュービン1928年）という本を書いた。当時彼はカントの「純粹理性批判」を十五回も繰り返し読み「知られざるカント」という本を書くつもりだとも言っていたということである。カントの作品に関してヘリゲルは、造詣が深く、それで次のような逸話がある。ハイデルベルク時代に、一年年上の、当時すでに有名であったカール・ヤスパース（1863年～1969年）の講演を聞いて、ヘリゲルはヤスパースのカント理解の不充分さを批判した。それ以来、2人の関係はすっかりそこなわれてしまった。このドイツ人の客員教授ヘリゲルは、日本人の学生に良心的に原文を研究し、さらに、自分で思索することを教えた。日本人の哲学の教師とは違って学生に論文をよく書かせた。そしてそれを克明に直し、詳細な批評も加えた。時には論文よりずっと長い批評がタイプで打って添えてあった。一見、無味乾燥な哲学的問題を論議する時にも、彼が燃えるような精神的情熱にとらえられている事に聴講者たちは気が付き感銘を受けたのであるが、言葉のハンディーがあって出された問題に答えるのは、たやすいことではなかった。それでも受講者たちが続けて来るよりにと「次回も又いらして下さい。この次はもっと興味深い問題話を話しますよ。さようなら。」という言葉で講義の最後を結んだものである。彼の弟子たちがヨーロッパの古典に、それほど詳しくないと知るや、彼はラテン語、ギリシャ語を教え、生徒とキケロやプラントを読んだ。ギリシャ語の勉強をさせることにより、ヘリゲルは東北大学に西洋哲学の基礎をよりよく理解させる地盤を作ったのである。彼は外国語をそれほど苦もなく学べる人物であったように思われる。ヘブライ語をはじめヨーロッパの言語をほとんど読むことが出来たと自ら述べている。しかし、このような語学に堪能なヘリゲルも日本語は修得出来なかった。弓を射る技術を学ぶ時にも弟子に通訳をたのんでいたのである。

ヘリゲルが日本でどのようにして禅への道を見つけたかは、彼自ら次のように印象的に書いている。「日本に着いて間もなく、私は日本人の同僚と会った。私達は、東京を歩き回った後で、ホテルの五階のカフェテリアでお茶を飲んで一休みした。突然地の底からゴォーゴォー鳴る音がして、足下に振動を感じた。グラグラ揺れギシギシ、バリバリ音がして、置物のガラガラ、カタカタ鳴る音がして来た。建物の中は騒然とし、主にヨーロッパ人の客たちが階段やエレベーターのある出入口の方にどっと突進して行った。地震だ！ 前年のひどい地震が強烈な思い出として、人々の心の中に残っていた。私も外に出ようと飛び上がった。私と話しをしていた同僚に急いで逃げるように促そうと思って、同僚を見ると、

彼は自分には何の関係もないことのように手を組み、目を閉じてじっと動かずに座っていた。どうしようかと決心がつかずにいるという風でもなかった。むしろためらわず全く自明のことをしている者のようであった。彼のこの様子は、彼をそのままそこに置きっぱなしにしておけず、むしろ私ももちろんわけのわからない恐怖感にとらわれながら、じっとそこに立ちつくしてしまうほど驚異的で、決然としたものであった。それから私は同僚の前に腰をおろして、何の意味があるのか、そこにいるのが得策なのか尋ねることもせず、じっと同僚を見つめた。どうしてかわからないか、私は何事も起らなかったかのように立ちすくんでいた。長い気がかりな何分かが過ぎていった。かなり長かったと思われる地震が終って、同僚は起った事に一言もふれずに地震の直前にとぎれた話しの続きをしはじめた。私は、注意深く聞ける心の状態ではなく、多分うわつつらな返事をしていたであろう。身体中にまだ抜けきれないショックが残っていて『逃げずに、私をとどめておいたものは、いったい何なのであろうか』『何故、私は本能的な衝動に従わなかったのであろうか』というような疑問が湧いてきた。私を落ち着かせることが出来たものが、何なのであるかという答をその時私は考え出すことが出来なかった。

数日後、私はあの日本人の同僚が禅僧であることを知った。彼はあの時すっかり精神を集中させていて、それによって〈侵害を許さない〉状態であったのだらうと、私はぼんやり推察したのである。

さて、私もそれまで禅については読んだり聞いたりしていたが、漠然とした想像の域から出ないものであった。日本行きをたやすくした禅をつきつめようという目論見はこの強烈な体験によって、禅について詳しく知ることをすぐに実行しようという意欲にかりたてられた。一方、私にとって禅の神秘主義、すなわち不動心をこえてゆく道を知る事が大切であった。私を圧倒したあの僧の不動ぶりは私に感銘を与えたが、あの不動ぶりを学ぶのが私の目的ではない。それが目的ならば他の方法でも修得できるし、わざわざ東アジアにまでその為に行く必要もないであろう。

私の計画を遂行しているうちに、禅というのは教えも教義も持たないものであるから、禅を詳しく突き止めることはそうたやすいことではないことがわかった。回り道をしながらゆっくり接することが出来るように、禅の影響を特に強く受けている芸術の一つに取り組むことを勧められ、この勧めに従った。『弓道における禅』の中に私はこの弓道の授業について書き記した。」(2)

そこでヘリゲルは、弓道への弟子入りをするのだが、彼の真面目な願いをわかってもらうのに困難な目に合わねばならなかった。ヨーロッパ人にはこのような異質の東アジアの精神生活を突き止めるのは全く無理なことであると彼は教えられた。同僚の一人で東北大学の法学部教授小町谷操三氏－彼は既に二十年来弓を稽古しており、当然大学随一の弓通と認められていた－に師匠として有名な阿波研造師範を紹介された。師範は、当初ヘリゲルの願いを断った。それは彼が前に一度外国人に教えたことがあるが、その際不愉快な目に会ったとの理由によるものであった。しかし、師範はヘリゲルが弾だけを好奇心から学

び知りたいということではなく、実際に自分の身体で禅仏教を体験してみたいと思っていることを知りヘリゲルとその夫人の弟子入りを承諾した。そうして厳しい訓練を初めたのである。

ヘリゲル夫人は、すでに華道と墨画を習っていた。その稽古にヘリゲルは、注意深い聴講生として列席していた。彼女は始め自宅で習っていたが、その後五ッ橋通り近くの東二番丁にある武田朴陽氏－阿波研造師範の知人である－に習った。そして1929年、長い間の難勉な稽古が実って師範の免状をとった。彼女は1958年夫の死後、「生花の道」を出版した。日本人の精神（3）を西洋にも知らせた鈴木大拙がこの本の序文を書いている。グステイ・L・ヘリゲル夫人は、自分の師武田朴陽を活力のあふれた背の高い簡素な絹の着物に身をつつんだ人物で、いろいろな面をもつ優れた芸術家であり、師として規律にあったよい作法をする、威厳に満ちた人物とであった書き記している。彼は日常生活でのつつましさ、誠実さ、さらに心や性格の育成を重視していた。と書かれている。ヘリゲル夫人は、仙台日記を不幸なことにドイツで紛失してしまったので、「生花の道」は、体験した時とその体験を書いた時の間隔が、大変離れていて「弓道における禅」のように経験直後に書かれたものではない。それに反して夫のヘリゲルの本は、1929年弓道の五段を取得した時に書かれたものである。この本は、新しい別次元の存在の中に、いらだちを覚えながらも徐々に入ってゆく過程を各授業ごとの詳しい記録をもとにして、目に見えるように写し出しているので、大きな反響をよんだのである。ヘリゲル夫妻は、結局は言葉では云い表わせない「偉大な教え」の奥義を知る為、禅に関係しているいろいろな芸道を深めることによって、ひき比べたり補い合って経験と理解の基礎を作り上げたのである。西洋風な論理的考法では、禅をほんの少ししか把握できないとはいえ禅の道を明確で、自負心のない、しかも納得のゆく言葉で西洋の読者に予感させるには、哲学をしっかりと学んだオイゲン・ヘリゲルが適任であったという事も否認できない事であろう。ヘリゲルは次のように書いている。「出来るだけ簡単な言葉を使って表現をする努力をした。それはただ禅が最も簡単な言葉で表現するように、教えているという理由によるばかりでなく、私が不思議な合言葉を借りて表現することしか出来ないからでもある。（4）

ここでは、ヘリゲルの細かな報告を詳しく書くことはさけない。本書の中では合理的な行いと、なるようにしかならないという非合理的な英知との間の矛盾が、再三問題とれている。この矛盾は、到達した段階ごとに新しい不安な形態で現われていて、ヨーロッパ人の弟子は深刻な世界観上の危機に陥り、そこから師の間接的な手助けによってやっと抜け出すことが出来た。彼を内面的に前進させたのはこのような苦しい反転だったのである。すなわち待つことを修得する為、まず行いたいという意図を捨てることを次第に学んでいった。長い何年も何年も続けられた修練の道の末に、彼はやって「的をねらわないのに当てられる」ということが、どういうことなのか把握するようになった。それまで知らなかった頂点に達した無心、無我と同様、沈潜の状態を修得したのである。ヘリゲルが師の名を常に畏敬の念をもって呼んだと同様、師匠もドイツ人の弟子に、最後に次のようなはなむ

けの言葉を贈った。「あなた方は教師と弟子とがもはや二人ではなく一つになっている段階に到達しているのです。ですから、たとえ広い海が吾々の間に横たわっていても、あなた方が習った通りに稽古する時には、いつも私はそこにいるのです。」さらにつけ加えて「ただ一つの事を私は、あなた方の心構えとして申さねばなりません。あなた方お二人は、この歳月の間にすっかり変わってしまわれました。これは弓道が、即ち最後の深みにまで達する射手の自己自身との対決がもたらしたものです。あなた方はこの事を、恐らく今までほとんどお気付きにならなかったでしょうが、故国で友人知人に再会されると、必ず感づかれる事でしょう。もはや以前のように彼らとしっくりしないのでしょう。あなた方は多くの事を別の目で見、別の尺度で測ようになりました。私も弟子の時にはこのような経験をしました。そしてこれは、弓道の精神にふれた人には、誰にでも迫ってくる事なのです。」(5)

別れ—ではない別れ—の時に、師範は彼の最もよい弓をドイツ人の弟子に贈った。友情の印であると同時に、師匠の精神が弓の中に現在している事を感じる印でもあった。「私は、あなた方に規則通り正しい稽古をどんな口実の下にも放棄しないように、弓矢なくとも礼法を行い、又少なくとも正しく呼吸する事なしに一日たりとも過ごさないように、お願いする必要はないのです。私がそのことをあなた方に願う必要のない訳は、あなた方は精神的弓射を、もはや、ほおっておくことが出来ないという事は私は知っているからです。その事についてお便りを下さるには及びません。しかし、時々写真を送って下さい。それによって私はあなた方がどのように弓を引いておられるかを見ることが出来るのです。すると私は、知らねばならない事をすべて知る事になりますから。」(6)

6年にもわたる仙台での教職を辞して—その間に彼はハイデルベルク大学の助教授に昇格していたのだが—ヘリゲルは、エアランゲン大学の体系哲学の講座に招聘されて、エアランゲン大学で教えることになった。7月16日神戸から乗船し、ヨーロッパに向って旅立って行った。その数日前に仙台で友人や同僚が別れの介せつ催し、ヘリゲル夫妻は、友情の深さをしみじみ心に刻みこんだ。沢山の友人や知人が汽車まで見送りに来たのであるが夫妻はその人々に次のような礼状を出している。「あなた方は、あんなにおことわりしたのに汽車の所まで来て、最後の別れの挨拶をし、別れをおしんで下さったのですね。この事に心から感謝申し上げます。あっという間に私達は、愛する仙台—私達のもう一つの故郷—そして私達の友人達から離れてしまいました。広い国々や海が私達を引き離していても、真の友情という強い感情を防げはしません。お元気でいらして下さい。心をこめて！ヘリゲル」

神戸の港にまで、仙台での親しい友人が見送りに現れていたことにヘリゲルは心を打たれた。上海に向けて発つ船に皆は長いこと手を振っていた。当時はヘリゲルは、これが日本との永遠の別れになるとは思ってはいなかった。後に日本の友人や同僚が再び彼を日本に招いた。そして、1941年夏、客員教授で来日する許可がドイツでおりたが、戦争がひどくなりこの計画は実現に至らなかった。その上、ヘリゲルが感謝の念を抱いていた恩師の

阿波研造師範が、1939年3月1日に60歳の生涯を閉じてしまわれていた。

ドイツ帰国後数ヶ月して、ヘリゲルは東北大学から、名誉博士（文学博士）の称号を授与するという通知を受けた。それは丁度1929年のクリスマスの日に電報で届き、大変な喜びを与えたのである。彼は後に「これよりすばらしいプレゼントは存在しないであろう。」と感動して書いている。この称号は、彼にとって重要だったのである。それは「弓道における禅」の表紙の裏の自分の名前の後にも、日本の名誉博士の称号を印刷しているところからも読みとれるのである。

エアランゲン大学でヘリゲルは、活発な学問的活動を行った。着任して間もなく哲学部の部長に選ばれた。彼の心あたたまる態度は、学生の中に人気があった。仙台に宛てた手紙に「陰うつな現在の状況の中ではありますが、学生が私を評価してくれるのは大変うれしいことです。講義室で4時間の講義をしています。満席どころか学生が室にあふれるほど集って来ます。大学で一番広いこの講義室でも間に合わなくなってくるでしょう。」と書いている。又、他の手紙には「8日前哲学ゼミの時に日本についていろいろなことを学生に尋ねられました。それで私は1時間半も日本の話しをしました。学生達に大いに興味を起こさせたのです。」哲学の上でヘリゲルは、新しい道を切り開いていった。仙台で過ごした時代が彼を変えたが、内面的なものをつきつめることは中断しなかった。「私達はよく仙台やそこでの友人の話しを到します。私達は、日本で過した年月を忘れることが出来ません。そこでは沢山の愛情のこもった経験をし、美しいもの、深みのある事を習いました。そして、それらが私達の精神的な財産になりました。」とある手紙に書いている。彼の弟子の一人であるミュンスター大学の哲学の教授である、フリードリッヒ・カウルバッハ（1912年生れ）は、「私はエアランゲンのオイゲン・ヘリゲルの下で、博士論文に対して理解と重要な助言を受けた。彼は、新カント派の伝統から出発したのであるが、根本においては、日本滞在中にその世界から離れてしまった。今、彼は彼の心の根底では禅の仏教徒である。」（7）と書いている。日本での豊かな経験が原因となってヘリゲルは、非常に意識的にドイツの神秘主義、特に専門家には極東の思考や知識と近いと考えられていてマイスター・エックハルト（1260-1327）の書物に深く取り組むようになったのである。（8）1935年12月の日本に宛てた手紙に、彼は「私が今年集中的にマイスター・エックハルトの研究をしてきたという事は、きっとあなたに興味を起させるでしょう。彼についての主な文献は充分研究しました。そして、私は、この研究に満足している所です。他の事はすべてさしおいて、マイスター・エックハルトについて一冊本を書く計画でいます。この研究に際して、問題になるのはマイスター・エックハルトが真の神秘主義者かどうかということ、はっきりさせることです。私はこの課題を肯定し、彼の文からこの証明を出すことが出来ると思います。しかし、彼の中に人々がトマス学徒、キリスト教徒を見ることがあれば、それは、マイスター・エックハルトを正当に評価していないという意味です。エックハルトは従来の思考型を使っていながら、しかしその思考型に全く新しい内容を満たしたのです。彼のキリスト教は、象徴的意味をもつもので、末梢的なもので、本質にふれないものです。

真人の神秘主義とキリスト教は、相ゆずれないものですから、この問題は、とてもおもしろい事柄であることが、おわかりでしょう。」(9)と書いている。しかし、残念なことにヘリゲルは、エックハルト研究を他の仕事で一特に大学の運営の点でも彼は多くの任務を負っていた一再三中断しなければならなかった。(1938年彼は学長代理に選ばれ、戦争の終了数年前には学長の公務を執行していた。)このようにして、予定されていた本は出版することが出来ずに終わった。その本が出ていたら、東西の本質を究める上での精神的かけ橋となっていたであろうと思われる。多くの講演の中でヘリゲルとその夫人には、第二の故郷となった日本についてよく思い出して話していたという。

戦後、70歳をすぎたヘリゲルは、健康がすぐれず日本との再会は考えられたかなかった。老年の居住地、ガルミッシュ・パルテンキルヘンに、日本からの客が訪れると大喜びで歓迎したものである。1953年、当時すでに83歳の高令に達していた鈴木大拙が彼の地を訪れた。これは二人にとって初めての出会いであった。二人の間には談話を通して、沈黙に致しても深い自然な理解が生れたものと思われる。鈴木大拙は、ヘリゲルが禅の本質をよく理解し、禅の真の精神のいぶきを感じ伝えた少ない日本人でない者の一人であるという、ここにもう一人の日本人の禅の師範が、1930年代から言明していた事実を確証した。ヘリゲルは、仙台で過した時を振り返って、彼の人生で最も楽しい時であったと書いている。仙台時代の古い知人が玄関の扉をたたくことがあれば、その日が彼にとって「祝日」であった。彼は日本人の訪問者に、同僚や友人はどうしているかと非常な関心をよせて尋ね、さらにおそばや茶わん蒸しや他の日本の食事をなつかしく思い出して話していた。「よく歩いた片平丁、大町、北一番丁などを心の中に思い出します。」とある手紙に書いている。

1955年4月18日、偉大なる親日家の一生は閉じられた。一番好んでいたという絹の着物を着せられて納棺され、ドイツのアルプス地方ガルミッシュ・パルテンキルヘンの町から遠くない所に埋葬された。

訳者注：手紙は故石原謙氏に宛てて書かれたものである。